

原 著

住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因の研究

大西 昭子^{1*}, 池田恵美子², 高藤 裕子³, 黒岩 郁子⁴,
今村 優子⁵, 松村 晶子⁶, 山岡 享子⁷

要約：本研究の目的は、住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因を明らかにすることである。対象者は、ささえあい活動を実践している一団体に所属するもの6名とし、半構成的面接法を用い、得られたデータを質的帰納的に分析した。その結果、ささえあい活動の継続を可能にする要因として【地域に対する愛着の気持ち】【脈々とつながる人脈】【ひとに対する慈しみのこころ】【仲間との出会いと結びつき】【活動に対する誇りと自信】【自然体でいられることの心地よさ】【自分らしさが保てる生活のバランス】【活動を実現させる骨組み】の8つのカテゴリーが抽出された。このことから、活動を継続するためには、決まった枠組みのない柔軟な参加様式と生活のバランスや、あるがままの自分を生きる場所の存在、活動を実現させる骨組みと後押し、ささえあい活動の基盤に根づく地域に対する愛着の思いが必要であると考えられた。さらにささえあい活動の継続が、人と人との交流やつながりを強化し、潜在する健康課題を拾い上げ、住民が主体となって地域の問題解決に向かう行動となることが示唆された。

キーワード：住民主体、ささえあい活動、地域看護、ソーシャル・キャピタル

I. はじめに

現在、我が国の老年人口指数は、総務省統計局の各年国勢調査報¹⁾によると、平成7(1995)年に17.4%と高齢社会になった以降も増加傾向にあり、平成23(2011)年では23.3%と少子高齢化が急速に進んでいる。そのため、特に地方や中山間地域では、人口の過疎化や空洞化等により、独居高齢者や高齢の夫婦のみの世帯が増加し、家族機能の低下による介護力不足、老々介護、さらには孤独死など、高齢者の健康上の課題が山積している。また、地域の中でつながりや関係性の希薄化といった地域力の低下という課題も深刻さを増

している。

このような社会的な背景の中、介護保険制度が創設され、国は地域包括ケアシステムの構築を掲げ重点的な取り組みを行っている。しかし、在宅や地域移行が進められていく中で、受け皿である地域での生活は公的制度だけでは担いきれない部分がある。その隙間を埋め、住み慣れた地域の馴染みの関係の中で生きていきたいという思いを支えるため、現在、様々な場所で地域特性を活かした住民主体によるささえあい活動が行われている。

このような住民主体による地域でのささえあい活動は、要支援者の地域生活を支えるだけでなく、

^{1*} 高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 Email: aonishi@kochi-gc.ac.jp

² 高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 Email: eikeda@kochi-gc.ac.jp

³⁻⁷ 高知学園短期大学 看護学科 Email: ytakato@kochi-gc.ac.jp, ikuroiwa@kochi-gc.ac.jp, mimamura@kochi-gc.ac.jp, smatsumura@kochi-gc.ac.jp, kyamaoka@kochi-gc.ac.jp

活動に参加する住民も生きがいややりがいを感じ、さらには地域でのつながりの再構築をもたらすものと考えられる。市田ら²⁾の先行研究では、ソーシャル・キャピタルが、高齢者の主観的健康観および主観的幸福感の両者に好ましい影響を与えている可能性が、また本橋ら³⁾の研究では、ソーシャル・キャピタルがメンタルヘルスのレベルと関連していることが示されている。さらには、儘田⁴⁾による文献検討でも、ほとんどの文献で健康指標との有意な関連が報告されており、近年の先行研究では、人や社会、地域でのつながりが、人々の健康に影響を与えている可能性が示されている。このように、地域のつながりを取り戻し、誰もが住み慣れた場所で、馴染みの関係に見守られながら地域生活を送ることができるためには、地域住民同士が相互に支え合う活動が不可欠であり、住民主体の地域活動の活性化がさらに期待される。

そこで、本研究では、住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因を分析し、住民主体のささえあい活動の推進による地域の健康問題の解決に寄与することを目的として研究を行った。

II. 研究目的

A県における住民主体のささえあい活動の現状と課題、住民による自身の活動の意味づけを明らかにすることにより、住民による主体的なささえあい活動を可能にするために必要な要因を検討することを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、地域の持つ特性や生活背景、価値観に応じた活動の取り組みと対象者自身の体験をありのままに捉えることが必要であるため、質的帰納的研究デザインを用いて研究を行った。

2. 用語の定義

本研究における、住民主体のささえあい活動とは、地域の住民が中心となって地域の健康課題や生活上の困りごとを自ら捉えて共有し、解決に向

けて助け合いながら行動することをいう。

3. 研究対象者

対象者はA県において住民主体によるささえあい活動を実践している一団体に所属するもの6名とした。この団体は、年々高齢者が増え、空き家や空き店舗が増えていくまちを「何とか元気にしたい」という思いで住民が立ち上げ、集いの場づくりや見守りを兼ねた弁当の配達等を行っている団体である。

本研究への参加に関しては、まず対象となる活動を実践している団体の代表者に対し、研究の目的および方法、倫理的配慮について説明し、協力を依頼した。さらに、代表者より実際の活動を行っている対象者を紹介していただき、個々に研究への協力について依頼を行った。

4. データ収集期間

平成25年8月～9月

5. データ収集方法

半構成的インタビューガイドを作成し、面接法にてデータの収集を行った。実施に当たってはプレテストを行い、インタビューガイドの修正に努めた。インタビューガイドの内容は、住民主体のささえあい活動の経過と現状、活動の意義や課題、対象者にとっての活動の意味づけについてであり、対象者には自由に語ってもらった。面接回数は1回とし、場所は対象者が安心して語ることができることを考慮し、施設内でプライバシーが保護できる部屋を確保した。面接の内容は対象者の了解を得て、ICレコーダーに録音するとともにメモで内容を記録した。

6. データ分析方法

面接終了後に録音データとメモをもとに逐語録を作成した。逐語録は繰り返し読み、対象者の語った内容について理解を深めた。その後、研究目的に沿って住民主体のささえあい活動を可能にする要因を表している内容を抽出し、コード化した。さらに、類似したコードをまとめ、カテゴリー化を行った。分析にあたっては、質的研究法の経験者から、適宜スーパーバイズを受け、さらに研究者全員で検討を重ねることにより、分析の妥当性

の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

本研究は、平成25年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号第33号 平成25年8月23日）。研究を行うにあたり、対象者に、研究の目的及び方法、研究協力への自由意思の尊重、個人情報保護および匿名性の保証、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、面接はプライバシーの保護ができる場所で行うことを口頭及び書面で説明した。また、録音データ及びメモは逐語録を作成した後に消去すること、研究に関するデータは鍵付きの棚で保管すること、研究結果は学会等にて公表することを説明した。その結果、了承が得られた対象者には同意書をもって研究への参加の同意を得た。

IV. 結果

1. 対象者の概要（表1）

対象者の概要は表1の通りであった。対象者の性別は女性が4名、男性が2名の計6名であった。年齢は41歳～68歳で、平均年齢は59.8歳であった。活動年数は2年～6年であった。ささえあい活動を行っている地域での居住年数は33年～68年で、平均年数は47.2年であり、6名中2名が地域外に居住していた。面接時間は約60分であった。

表1 対象者の概要

ケース	性別	年齢	活動年数	居住年数
A	女性	68歳	6年	68年
B	男性	63歳	6年	地域外
C	女性	62歳	6年	33年
D	女性	64歳	6年	48年
E	女性	61歳	2年	地域外
F	男性	41歳	2年	40年

2. 分析結果

分析の結果、住民主体のささえあい活動を可能にする要因として、【地域に対する愛着の気持ち】【脈々とつながる人脈】【ひとに対する慈しみのこころ】【仲間との出会いと結びつき】【活動対

する誇りと自信】【自然体でいられることの心地よさ】【自分らしさが保てる生活のバランス】【活動を実現させる骨組み】の8つのカテゴリーが抽出された。その結果を表2に示す。以後、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは《 》、ローデータを「 」で示す。

1) 地域に対する愛着の気持ち

【地域に対する愛着の気持ち】とは、慣れ親しんだ地域を大事に思う気持ちのことであり、《地域を元気にしたいという熱い思い》《町が歩んできた歴史への慈しみ》《地域の問題の認識》《利益を追求しない気持ち》《活動の限界に対する葛藤》の5つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、「この地域ってだんだん元気がなくなって、シャッターが下りて、お年寄りが多くなって、なんか、活力がなくなったよねという話をしてて。」と《地域の問題の認識》について語り、「なんとか、なんとかこう、もうちょっと元気になることを考えないといけないね」と《地域を元気にしたいという熱い思い》について語っていた。一方で対象者は「お弁当代も払ってもらっていない方も何人もいまして、部屋の様子や息子さんの働いている様子を見ると、きつく…言えなくて、そのままになってしまっていたりして、なんかとても…、矛盾を感じています。」と【地域に対する愛着の気持ち】があるからこそ生じる《活動の限界に対する葛藤》について語っていた。

2) 脈々とつながる人脈

【脈々とつながる人脈】とは、目標に共感する人たちの小さなつながりが大きな人と人とのつながりになっていくことであり、《ひととのつながり》《地域とのつながり》《関係機関とのつながり》《話し話される中で生まれる交流》の4つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、「あそこでお風呂が沸くようになってよかったよね、と役員のメンバーと言い合いながら、でもここにお風呂が出来てよかったけれどお風呂だけじゃないよねというこのつぶやきのような、そういうお話があって、そうだね

と。」と、目標に共感する人たちの小さなつながりの中でのつぶやきが《話し話される中で生まれる交流》によって大きなつながりへと広がっていくことを語っていた。また、《ひととのつながり》では「(ポツリポツリ人が来ている) そんな中で、来た人同士も、お友達になったり、いろんな趣味の人達同士がくっつきあって、この間誰々さんたちと遊びに行ってたよ、みたいなことがあったりとか、いろんなこう、友達とのつながりが出来たり、おしゃべりしてたら、ね、そんな風になるんですよ」と集うことによって人とのつながりが広がっていくことを語っていた。さらに、《地域とのつながり》では「ピンポンを押すのではなくて、ガラッと開けて、もうそこに食卓があるという感じのそういう付き合いです。割合、密にね、付き合い合ってきたから。昔の下町のまんま、いまだにきていますね。」と昔ながらの地域のつながりが継続している様子を語っていた。

3) ひとに対する慈しみのこころ

【ひとに対する慈しみのこころ】とは、ひとりひとりを大切に思う気持ちのことであり、《ひとりひとりに注ぐ関心》《ひとりひとりを思いやる心の高まり》《気づきの共有》《地域を超えた人への思いやり》の4つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、「誰々さんが何とかした、誰々さん最近見ないね、今どこかに行っているみたいとそんな話がここでは普通に聞ける」と《ひとりひとりに注ぐ関心》について語っていた。また、《ひとりひとりを思いやる心の高まり》では「お客さんの生活面がというか、まあ部屋が殺風景とかねえ、ちょっとさびしい何もないような方もいたりして、ちょっとねえ、つらい…、かわいそうだなあっていうのもあるし。そういうところはやっぱり、気を付けてあげないといけないなあというのはありますね。」と語っていた。

4) 仲間との出会いと結びつき

【仲間との出会いと結びつき】とは、活動をする中で仲間を信じ、結ばれることであり、《代表者への信頼》《信頼できる仲間の存在》《持ちつ持たれつの関係》の3つのサブカテゴリーが含まれ

る。《代表者への信頼》では、「私だけでなく、他の人にもそんな気遣いができる。それは、心の大きさじゃないでしょうかね。人間としても大きいと思います。」と語っていた。また、《信頼できる仲間の存在》では「自分が行けない仕事のときは厨房で手の空いている人が行ってくれたり、お弁当の方が忙しくて手が足りない時に自分が空いていたら、お弁当を配ったりとか、洗い物をするとか、お互いが力を合わせているというかね。」と語っていた。

5) 活動に対する誇りと自信

【活動に対する誇りと自信】とは、地域の人からの信頼を得ることで自分たちの活動が価値あるものと信じられることであり、《必要とされていることの自覚》《良い変化の自覚》《自分がやっていることに対する責任感》《役に立っているという自負心》《地域の人からの認知》《地域の人からの信頼》《ひとつのことを成し遂げた達成感》《活動を啓発する必要性の認識》の8つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、《役に立っているという自負心》として「ただの弁当屋だけでなく、もっとこう深く高齢者と関わって、例えば、いなかったらこっちへ帰ってきて電話をかけて、お弁当届きましたかと言って、電話がかからなかったらもう一回息子さんにかけるとか、隣の人にちょっと見に行つてとかね、そこまでするのでね。(中略) 思い入れはもっとあれですね。」と語っていた。さらに、《必要とされていることの自覚》では「仕事はここへきたら、それこそ待っていてくれる人がいる。自分が行かなかったらその人は困る。」と語っていた。そして《地域の人からの認知》として「うん、浸透してきて。弁当も届け、ここでお茶も飲んで人と会話出来る。何か困っていたら家事も手伝いに行っている。手伝いに行っているということもみんな分かってきて、だから、『必要な施設だね』っていう人は多くなってきていると思うんだよね。」と語っていた。また、《自分がやっていることに対する責任感》では、「その時には、電話をもちろんしたんですけど出なかった

んで。ほんで3日目ぐらいのときに、まあそういったあのう、お客さんが亡くなっていたという…あの後からちょっと行った時に聞いて。その後はやっぱり、そういう見守りがやっぱりすごく大変だな、重要になってくるなっていうのが。」と語っていた。

6) 自然体でいられることの心地よさ

【自然体でいられることの心地よさ】とは、無理をせずありのままの自分でいられることであり、《培ってきた力を活かせる満足感》《気負いのなさ》《活動を楽しむ気持ちの持ちよう》《地域に溶け込む在りよう》の4つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは、対象者は「ちょっとでもその時期のものを食べてもらいたいというのを常に頭に入れてメニューを考えたり、できるだけ、無理なこともあるけど…、やりがいがあって楽しいですね。やりがいがあるということでお勤めしているところよりも今が一番いいですね。」と《培ってきた力を活かせる満足感》について語っていた。また、《気負いのなさ》では「何か行き当たりばったりというか、思いつきというか、思いつきでこんな風になったらいいのになあ、みたいなことを言いはじめ、そうやねみたいなことで、だんだんこう…」と語っていた。さらに《地域に溶け込む在りよう》では、「イベントのときとかに継続的にやるってことが、まあ地域の中でもっと親密になっていけるんじゃないかというのが。お祭りだったら焼きそばを焼いて作って売ったりとか（地域の行事にも）参加して、まあ、溶け込むっていうかね、やっぱり中へ、うん…、そういったことで、つながっていくっていうか。」と語っていた。

7) 自分らしさが保てる生活のバランス

【自分らしさが保てる生活のバランス】とは、できることを自分のペースで行うことで、日常生活との調和がとれていることであり、《働き方の柔軟さ》《出来る人が出来ることをするあり方》《日々の生活の充実感》の3つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、「その時その時、出来る人

がするようにしている。声をかけて来れる人が集まったり、たくさん集まったり、集まらないこともある。負担にならないように無理をしないように、無理をすると続かなくなる。」と《出来る人が出来ることをするあり方》として語っていた。また、《日々の生活の充実感》では「みんなそれぞれに趣味とか持っているしね。それを上手に回しながらやっている。仕事と家だけではどうかな。みんなちょこっとした趣味をもってやっている。仕事と家の用事と趣味ができるように無理のない活動をしている。」と語っていた。

8) 活動を実現させる骨組み

【活動を実現させる骨組み】とは、自分たちの活動を可能にするための土台のことであり、《まとめ役存在》《事務的な作業を担う存在》《行政からの後押し》《活動の核となる場所》《活動の源となる資金》の5つのサブカテゴリーが含まれる。

ここでは対象者は、「この職場ってみんなが代表みたいなんですよ。職員会でもああいったら、こうやったらうまくいくんじゃないっていう提案をするように心がけていまして、みんなが。アイデアを出すっていう、その、まとめ役なんですよ、私って、まあたぶん。」と語っていた。また、《事務的な作業を担う存在》では、「事務が出来ない人がいない、パソコンが出来ない人がいない、でも例えば行政から委託事業をもらってやろうとしても書類はほとんどパソコンで作らないといけない。そういうことに力を割くと、あの、本来の自分たちのやりたいことが出来なくなってしまうんで、だからそっちの方を手伝おうか、それ以外の他のところはみんな力を発揮してください。その方が動くんだらうなと思って入ったんです。」と語っていた。さらに、《行政からの後押し》では「市の職員が訪ねてきて言うには、本当はこのような活動が必要なんだ。今、市が関わっているのはありますよね。でも地域で立ち上げるのが本当は大事なんだ、というのをすごく言っていた。」と行政からの活動に対する評価を得ることで自分たちの活動の意義を感じたことを語っていた。

表2 住民主体のささえあい活動が継続できる要因

カテゴリー	サブカテゴリー
地域に対する愛着の気持ち	地域を元気にしたいという熱い思い
	町が歩んできた歴史への慈しみ
	地域の問題の認識
	利益を追求しない気持ち
	活動の限界に対する葛藤
脈々とつながる人脈	ひととのつながり
	地域とのつながり
	関係機関とのつながり
	話し話される中で生まれる交流
ひとに対する慈しみのこころ	ひとりひとりに注ぐ関心
	ひとりひとりを思いやる心の高まり
	気づきの共有
	地域を越えた人への思いやり
仲間との出会いと結びつき	代表者への信頼
	信頼できる仲間の存在
	持ちつ持たれつの関係
活動に対する誇りと自信	必要とされていることの自覚
	良い変化の自覚
	自分がやっていることに対する責任感
	役に立っているという自負心
	地域の人からの認知
	地域の人からの信頼
	ひとつのことを成し遂げた達成感
	活動を啓発する必要性の認識
自然体でいられることの心地よさ	培ってきた力を活かせる満足感
	気負いのなさ
	活動を楽しむ気持ちの持ちよう
	活動に溶け込む在りよう
自分らしさが保てる生活のバランス	働き方の柔軟さ
	出来る人が出来ることをするあり方
	日々の生活の充実感
活動を実現させる骨組み	まとめ役が存在
	事務的な作業を担う存在
	行政からの後押し
	活動の核となる場所
	活動の源となる資金

V. 考察

1. 住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因の特徴

1) 決まった枠組みのない柔軟な参加（活動）様式と生活のバランス

対象者は、他者から必要とされていることの自覚や役に立っているという自負心など、様々な形で【活動に対する誇りと自信】を語っていた。それと同時に自分自身の趣味や家庭生活などの日々の生活の充実感ももち合わせていた。この充実感と働き方の柔軟さがあり、出来る人が出来ることをするあり方によって、【自分らしさが保てる生活のバランス】がとれることにつながる。この自分の生活を尊重して、自分の得意なことを出来る時にするという柔軟な参加様式と自分の生活との絶妙なバランスによって、対象者が生き生きと活動できることにつながっていた。また、このような決まった枠組みのない柔軟さが【自然体でいられることの心地よさ】を生み、さらなる活動の推進と強化に結び付いていることが考えられた。大池らは「柔軟性のある枠は自己決定の芽を育むだけでなく、主体の芽も育み、自己成長を促す意味でも重要である⁵⁾」と述べている。さらに宇都宮は、「生活を支える取り組みは、ささえられる側だけでなく、ささえられる側も生活の一部として溶け込み、無理のないものである必要がある⁶⁾」と述べている。今回の研究結果でも、対象者は無理なく参加でき、気負わずに活動できる柔軟さについて語っていた。このように活動様式が多様で個々の生活とのバランスが取れていることが活動の継続を可能にする要因として考えられた。やらなければならない使命感や義務感を重視し、日常生活がおろそかになってしまうと負担感が増し、活動の限界につながってしまう可能性もある。自らの生活の楽しみや生きがいを大切に、仲間の生活も尊重し合うことができるバランスが必要であると考える。

2) あるがままの自分を生きる場所の存在

活動に参加している人々は、その年齢に差はあ

るが、みなこれまでの人生で得た仕事や地域生活、家庭生活での経験を活かして、困っている人の役に立つことへの満足感や自負心について語っていた。この満足感は、仲間の《ひとりひとりにそそぐ関心》に支えられ、《気づきの共有》を経て、自分自身や地域の《良い変化の自覚》をすることで、より大きくなっていくと考えられた。すなわち、パソコンの操作や料理、介護経験など、これまでに培った得意なことを自分のペースで行い、何か地域の人々の役に立つこと、良い変化を見てくれる仲間が存在すること、小さな変化や次のステップについて仲間と《気づきの共有》ができることが力となり、もっと喜んでほしいから工夫するといった良いサイクルが生まれていた。このように、対象者の活動の在り方には、「少しでも元気に」といったさり気ない活動を自ら思いつき、進んで展開しているという特徴があった。

住民の活動は、小さなきっかけを契機として始まり、活動をしていくうちにコミットメントが高まるというサイクルを呈していた。大池らは「自分たちの持てる能力を活用し、努力したことが、市民の役にたっているという人としての最高の喜び・やりがいにつながり、さらなる活動への意欲を喚起すると考える⁵⁾」と述べており、このようなサイクルの存在が、住民主体の活動の特徴であると考えられる。本研究でも、この活動への小さなきっかけは、自分たちがこれまでの人生で培ってきた力を活かせるものであり、「町を元気にする」という価値の共有を基盤として、活動を自由に捉え、あるがままの自分を活かしていた。

活動にあたっての自由な捉えは、住民主体の活動の特徴である。シャイン⁷⁾は、人が集団に加入する際の課題を①自己のアイデンティティの保持、②集団のメンバーに対するコントロールと影響力、③集団の目標と個人の要求の重なり、④受容と親密さの4つに概念化しており、井部は、これらの概念を用いて、新しく集団に入るメンバーが越えなければならない壁について「組織のメンバーは自分の居場所をみつけるまで、これらの問題に取り組み、いくつかの成長の痛みを耐えなけ

ればならない⁸⁾」と述べている。しかし、住民主体の活動では、これらの課題は、地域に住み地域で生活を送る過程を通して、すでにある程度解決されている。従って、住民は「町を元気にする」という目的に賛同すればそのまま、あるがままの自分として活動できる。そこには、集団の文化を読み、その文化に合わせた一員になるための自己規制は不要である。

服部は、エリクソンの生涯人間発達学の視点から、「成人後期の行動様式としての『あるがままを生きる』ことは、若き日に自我にめざめ、自我同一性を確立していく長い道のりの中で自己の存在を自分なりに了解し、価値づけ、受け入れ、自分の中核にあるものを素直に愛おしみ、あるがままの自分らしさを大切に生きることを意味する⁹⁾」と述べている。その人なりの人生を生きてきた人々が、あるがままに参加でき、仲間から認められ、自己を価値づけるというサイクルの存在が、活動を継続する大きな要因となっていると考える。住民のそれぞれの持つ価値観、アイデンティティ、人脈、といった「あるがまま」を使つての活動が、自然に少しずつ広がり結びついていくことは住民の主体的な活動を後押しすることにつながると考える。

3) 活動を実現させる骨組みと後押しの重要性

本研究では、地域において住民主体のささえあい活動が継続されるには、【活動を実現させる骨組み】が不可欠となることが分かった。骨組みとは、《活動の核となる場所》や《活動の源となる資金》等が含まれる。行動を起こすためには、何かしたいという思いや信念のようなものが原動力となる。一方で、内発的な動機づけだけでなく、ハード面といった【活動を実現させるための骨組み】が同時に必要である。この双方が合わさることによって、住民の主体的な活動が生まれ、さらに継続するための要因となっていた。この《活動の核となる場所》の存在によって、住民たちは気軽に集うことができ、そこで地域や生活上の問題が共有化され、問題の気づきにつながる。そして、

その気づきをそのままにせず、手助け活動へとつなげ、相互にささえあい仕組みづくりを行っていた。

この仕組みづくりを後押しするのが行政の役割である。特に資金面では行政による支援が必要となる。国や地方公共団体では住民主体の活動を資金面からサポートするため、各種の補助金制度を創設している。行政からの補助を得るためには、それなりの実績と様々な申請書類の提出が求められる。しかし、特に退職後の時間を活用してボランティアな活動を展開している団体は、そういった事務作業を担うことができる存在が不在なことも多く、苦慮しているのではないかと思われた。今回対象とした団体では、《事務的な作業を担う存在》がいたことで、補助金の導入が可能となっていた。このように、活動を継続させるためには、資金面での後押しとともに、事務的な作業の簡素化やサポート体制を整えていくことも《行政からの後押し》として必要ではないかと考える。青山らは広報の強化等により「地域住民の参加意欲が高まり、それを反映出来るような地域活動の場の整備や情報の提供等『支援するサイクル』が整っていれば、活動を通してやりがいや生きがいを得られ、自己実現の欲求を叶えることができる¹⁰⁾」と述べている。本研究結果からも、このような側面的な支援によって活動の安定化が図られ、何かの困難にぶつかった時にも揺らぎながらも継続していくことが可能になるのではないだろうかと考えられた。

また、誰かに言われて行うのではなく、住民自身が自ら必要性を感じて行う活動は、やらされ感を感じることが少ないため、少しの負荷や負担感があっても、それをやりがいに変えて活動を継続することが出来ると考える。活動を継続するためには、活動する住民の意志や行動力、仲間の支えなどが必要となるが、それを後押しするものとして、地域の中で活動する保健師の役割は大きいと考える。

2013年には保健師活動指針が改定された。そこでは地区活動に立脚した活動の強化として「地区

活動を通じてソーシャル・キャピタルの醸成を図り、それらを活用して住民と協働し、住民の自助および共助を支援して主体的かつ継続的な健康づくりを推進すること¹¹⁾とされている。保健師が地域に足を運び、実際に活動の現場に出向き、住民とともにある活動の中で、住民たちが活動の意義を感じることが出来るように、行政の立場から客観的な評価を言葉にして伝えることが効果的であると考えられる。言い換えるとこのような地域に根ざした活動は、地域住民に感謝されたり、受け入れてもらえたり、行政から認めてもらえる体験を通して、自分たちのやっていることへの肯定的な評価を直接受けられる。そして、活動意義を常に感じられることによって、その活動の継続がさえられているのではないかと考える。

また、保健師が常に住民に声をかけたり、催し物の場に顔を見せ住民と体験を共有したりすることは、保健師自身の「人となり」を知ってもらう機会となる。住民は、何かあった場合には相談できる頼れる存在として保健師を認識することができる。そのことが住民の安心感につながり、活動継続の支えとなると考える。

同時に、地域に出向きその場に身をおき住民個々と信頼を築くこのような活動は、常に地域で起こっている状況を把握しタイムリーな情報を得ることができ、保健師が地域をよく知ることにつながる。このことによって、地域に埋もれている健康課題への気づきや支援を必要とする人々の掘り起こしが可能となる。つまり地域のニーズを把握し、専門職の立場からニーズに沿った支援を提供することができるといえる。また、支援を必要とする人を地域の中の社会資源である「ささえあいの場」につなぐこともできる。

さらに地域に根ざした活動を通じて、保健師自身が地域に愛着をもち、住民とふれあう心地よさや住民の底力を経験から学ぶことで、地域活動の必要性を実感できる。保健師自身も住民にささえられ、保健師として成長していくことができると考える。

このように、住民が行うささえあい活動に寄り

添うことで、保健師は地域の健康課題を整理し、住民のネットワークを活かしながら見直しをもった支援を行うことができる。これこそが、保健師に求められるソーシャル・キャピタルの醸成である。保健師が地域に出て人々をつなぎ、そしてつながりの継続をささえ、地域の力を信じて住民と協働して地域づくりを行うことが重要である。

4) ささえあい活動の基盤に根づく地域に対する愛着の思い

今回の研究結果から、住民主体のささえあい活動の源であり、基盤となるものとして、【地域に対する愛着の気持ち】があることが考えられた。《地域を元気にしたいという熱い思い》が原動力となって活動が始まり、活動の充実感や責任感、達成感等により継続への意欲が高められる。このどちらも、基盤には地域への深い愛情が影響していると考えられた。高橋らも、「地域への愛着は、人々の地域に対する態度や関与を牽引する重要な心理的要件であり、地域における住民の主体的な健康づくりを考えていく上で重要な役割を果たすものと考えられる¹²⁾」と述べている。

近年、少子高齢化が急速に進行していく中で、地域の課題として空洞化や関係性の希薄化が浮き彫りとなっている。近所付き合いが薄くなり、地域活動も衰退していくと、【地域に対する愛着の気持ち】や思い入れはなかなか形成されにくいのではないかと考える。また、虚弱な高齢者や老々介護の世帯、認知症の問題などを抱える人々への見守り機能が低下し、住み慣れた地域で馴染みの関係の中で暮らすことが困難となっている現状がある。

本研究では、住民自身が地域を何とか元気にしたいという思いから、生活上の困りごとに対して「ちょっとした手助け」を行うなどの生活に密着した活動によって、人と人をつなぎ合わせており、それが地域のつながりを強化していると考えられた。さらに活動を通じて《ひとりひとりに注ぐ関心》が高まり、【ひとに対する慈しみの心】を育み、他者を思いやり、気遣えることの連鎖が

膨らみ地域への愛着として発展していくことが考えられた。成木は、「《近隣コミュニティとの一体感を得る》と認識できたのは、日常的に“心遣いしあう”交流が拡大することを体験し、“心遣いしあう”大事さを近隣と共有することを実感できた為であった¹³⁾」と述べている。このように小さなつながりや気遣いが波及することによって、地域全体への愛着を強めていた。これらの活動による地域への愛着の高まりは少子高齢化に伴う課題を解決するヒントになると考える。

【地域への愛着の気持ち】は日常生活の中で自然に形成されてきた昔と違い、今は意識的につながっていく、つなげていくことが必要になると考える。日々のささえあい活動の中に、次世代を担う子どもたちとともにできることを位置づけ、子どもたちの生活の中に自然と息づくことができるようにすることで、現在の活動と【地域への愛着の気持ち】を引き継いでいくことが可能となるのではないだろうか。共に活動することによって生まれるつながりと、現在の活動を“見せる”ことによって受け継ぐことができる道筋を作っていくことが必要である。そういった人と人とがつながりあう力によって、地元という範囲にとどまらず、一定の地域の枠を超えた深い【地域への愛着の気持ち】が広がっていくのではないかと考える。

このように、住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因には、【地域に対する愛着の気持ち】が源流となり、大きく広がっていくという特徴があり、それが活動の継続を支える要因の根幹であることが示唆された。

2. 住民主体のささえあい活動の継続が地域の健康課題に与える影響

1) ささえあい活動が個人の健康課題に与える影響

(1) ひとりひとりの健康に与える影響

対象者は、地域の一人ひとりに関心を寄せ、個々の困りごとに対して、《出来る人が出来ることをするあり方》という活動を気負いなく行っていた。また、活動を通じた《ひととのつながり》は、地

域の課題を共有することにつながっていた。この活動は、“猫の手のお手伝い”と名付けられ、健康に関する問題意識というよりは、日常生活の困りごとを解決するものとして意識されていた。当初、人が集う場所づくりから始まった活動は、自然に、食事と困りごとの解決を目的とした活動に進展していった。これらの活動は、個々の住居に出向いて行われることが多く、住民の生活の様子を知る機会となっていた。特に配食サービスとして生活の場へ出向くことは、対象者の生活の様子を見守ることにつながっていた。配食を機会として定期的に会うことで、対象者の少しの変化に気づくことができ、関係機関と連携することで健康状態の悪化予防ができると考えられた。さらには、定期的に誰かが関わってくれることにより、何らかの変化を早期に発見できるとともに誰かが見守ってくれている安心感となり、独居や高齢者世帯、認知症などの健康上の課題を持ちながらも地域で暮らすことを支えることにつながり、地域の一人ひとりの健康に寄与していると示唆された。

(2) 活動をしている人たちの健康への影響

ささえあい活動を継続することにより、地域の中で誰かの《役に立っているという自負心》や《必要とされていることの自覚》が生じる。このことが、対象者自身の生きがいとなり、《日々の生活の充実感》につながっていくという体験をしていた。これらを通して自己の存在に対する価値を見出すこととなり、いきいきと活動することができるのではないかと考えられた。本間は高齢者の生きがいに関する研究において「自分の能力を活かし、自分が必要とされているという存在意義を感じたり、健康を保ったり、人との関わりを楽しむことで、生きがいを感じている¹⁴⁾」と述べている。今回の研究でも活動の中心となるのは主に60歳以上で、退職後の人生を地域活動に活用している住民が多かった。活動の継続によって、地域の中での自分の居場所を獲得し、ありのままの自分であることによって、自らの健康度を向上させる可能性が示唆された。

反面、対象者は、活動の中で生じる自らの《活動の限界に対する葛藤》と《自分がやっていることに対する責任感》の間で揺れ動き、悩みながらも、継続して支えることを選択していた。その判断の過程には、同じ悩みやしんどさをもつ仲間が存在があり、お互いの思いを共有することで乗り越える力に変えていくといった仲間の持つ力が大きいことが考えられた。活動の中で生じる困難も力に変えていけることで、個人及び団体の問題解決能力や対処能力を高め、さらなる達成感の積み重ねとなる。このことが、活動を行う対象者自身の健康度も高め、地域の中で自分らしく生きることを支えることにつながるのではないかと考える。

2) 地域の健康問題への影響

ささえあい活動を継続することによって、地域の中で、人と人との交流が自然に行われ、地域で認知され、なくてはならない存在となっていた。地域を活動基盤とした住民の生活に直結するささえあい活動は、地域の中に潜在している健康問題や生活上の課題を浮き彫りにしていった。つまり、一人ひとりに向き合うことや住民の生活の場に出向くことによって、公的制度では担いきれない生活の上での困りごとや健康上の問題が把握される。その小さな気づきが積み重なって《地域の問題の認識》につながっていた。一人ひとりが認識した問題を共有し、広い視野で地域を捉えていくことで、地域の課題への気づきにつながっていた。

ささえあい活動を継続することによって、日々の活動から地域全体の課題を感じ、その課題が明らかになることで、新たな活動の発展へと向かっており、このこと自体が地域の健康問題の解決に寄与すると考えられた。山口¹⁵⁾の先行研究では、地域住民からの活動認知が高いことは、組織活動の活性化のために必要な要素となっていることが明らかにされている。地域に入り込んで活動をし、活性化させながら継続していくことで地域全体の健康度が向上すると考える。

このように、住民主体によるささえあい活動を

継続することによって、個人が元気を取り戻し、関わる人々が元気になることにつながる。そして、双方の住民の健康度の向上が図られ、地域全体が元気になることで、住み慣れた愛着のある地域で最期を迎えたいという思いを支えることにつながっていくと考える。

VI. 結論

本研究の結果、活動自体の緩やかさにより生活とのバランスが取れることで参加意欲が高まり、参加することによって達成感や自尊感情が高まり、さらに活動が活性化されるという良い循環が繰り返されていた。ささえあい活動を継続することによって、地域の中で自然に人と人との交流が生まれ、それが大きくつながり、地域全体に広がっていくことが明らかとなった。このつながりによって、住民一人ひとりの健康問題に対応でき、その対応が繰り返されることで地域全体の健康度の向上に寄与すると考えられた。住民主体の活動の継続を支えることは、ソーシャル・キャピタルの醸成を意味し、人々が慣れ親しんだ地域の中で自分らしくいきいきと生きることにつながっていくと示唆された。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の研究対象者は一団体に所属する中心的な役割を担っているもの6名であり、活動に関わるすべての人々の認識を捉えるには限界がある。今後は、対象者や方法を変えて、継続できている要因の解釈についてさらに洗練化し、地域の健康課題への寄与について分析を深める必要がある。

謝辞

本研究に快くご協力いただきました研究対象者の皆様方に心より感謝申し上げます。

引用文献 (References)

- 1) 財団法人厚生労働統計協会：国民衛生の動向 2012/2013, 2013, 59 (4), 42.

- 2) 市田行信, 吉川郷主, 平井寛ほか: マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャル・キャピタルに関する研究, *農村計画論文集*, **2005**, 7, 277-282.
- 3) 本橋豊, 金子善博, 山地真佐子: ソーシャル・キャピタルと自殺予防, *秋田県公衆衛生学雑誌*, **2005**, 3 (1), 21-31.
- 4) 儘田徹: 日本におけるソーシャル・キャピタルと健康の関連に関する研究の現状と今後の展望, *愛知県立大学看護学部紀要*, **2010**, 16, 1-7.
- 5) 大池明枝, 越田美穂子, 荒谷多香子: 自主的参加による地域組織活動における住民エンパワメントを支える要因, *日本看護学会誌*, **2006**, 15 (2), 62-70.
- 6) 宇都宮千穂: 都市における生活支援とまちづくり, *IRC 調査月報*, いよぎん地域経済研究センター, **2010**, 285, 30-39.
- 7) Edger H. Schein, 稲葉元吉, 岩崎靖, 稲葉博之共訳: *新しい人間管理と問題解決*, **1993**, 神奈川, 産能大学出版部, 75-89.
- 8) 井部俊子: マネジメントの魅力, *ナーシング・トゥデイ コレクション*, 日本看護協会出版会, **2000**, 15, 151-154.
- 9) 服部祥子: *生涯人間発達学入門 人間への深い理解と愛情を持った看護者を育てるために*, 看護教育, 医学書院, **1998**, 39 (8), 640-645.
- 10) 青山美保, 井出喜子, 新志春菜ほか: 地域活動を“いきいき”として支えている人の要因, *島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要*, **2010**, 4, 129-136.
- 11) 中板育美: 保健師活動指針のポイント, *月刊地域保健*, 東京法規出版株式会社, **2013**, 44 (9), 18-29.
- 12) 高橋香子, 末永カツ子, 栗本鮎美ほか: 住民の主体的な健康づくり活動の推進要件に関する検討, *東北大学医学部保健学科紀要*, **2010**, 19 (2), 73-80.
- 13) 成木弘子: 都市での健康づくり活動に関するグループ活動を通じたコミュニティ・エンパワメント, *保健医療社会学論集*, 2008, 19 (2), 8-20.
- 14) 本間容子, 岡田みゆき: 高齢者の生きがい, *北海道教育大学釧路校研究紀要*, **2005**, 37, 69-79.
- 15) 山口忍: 地域組織活動の活性化に向けての一考察, *順天堂大学医療看護学部医療看護研究*, **2006**, 2 (1), 38-44.

Original paper

Study of the factors that enable continuation of the activities of the inhabitants of mutual support.

Akiko OONISHI^{1*}, Emiko IKEDA², Yuko TAKATO³, Ikuko KUROIWA⁴,
Masako IMAMURA⁵, Syoko MATSUMURA⁶ and Kyoko YAMAOKA⁷

Abstract: This study is to clarify the factors which facilitate the continuation of a local inhabitant's support activities. The subjects were 6 participants who belong to the organization which conducts activities. Semi-structured interviews were conducted. The data obtained from the interviews was analyzed using the qualitative induction method of analysis.

As a result, the 8 categories extracted were [affection to the community], [continued relation of inhabitants], [affection for people], [continued intergroup relationships], [pride and confidence in activities], [feeling comfortable and natural], [balance in one's lifestyle and identity] and [structure which realizes activities]

For the continuation of activities, necessary factors include a flexible lifestyle without rule, a place which keeps one's identity, safe structure and support which realizes activities, and affection to the community.

Key words: activities of the inhabitants, activities of mutual support, community nursing, social capital

^{1*} Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Email: aoonishi@kochi-gc.ac.jp

² Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Email: eikedada@kochi-gc.ac.jp

³⁻⁷ Kochi Gakuen College, Department of Nursing, Email: ytakato@kochi-gc.ac.jp, ikuroiwa@kochi-gc.ac.jp, mimamura@kochi-gc.ac.jp, smatsumura@kochi-gc.ac.jp, kyamaoka@kochi-gc.ac.jp

